

## 四旬節第3主日A

ヨハネ4・5-42

**皆**さん、今日は、四旬節第3主日です。今日の典礼のテーマは、「**渴きと、渴きの癒し**」です。渴きを本当に癒すものは何か、考えましょう。第1朗読は、イスラエルの民がエジプトを出るときに飲み水を与えよと泣き叫んだという箇所でした（出エジプト17・3-7）。この記事のように「渴き」は飲み水によっていやされるのでしょうか。

今日の福音書では、イエスとサマリア人の女性との出会いと会話について聞きました。イエスは長い距離を歩いて疲れ果てたのでしょう。「旅に疲れて」井戸のそばに座っておられました。そこにサマリア人の女性が水を汲みにきました。イエスは、女性に「**水を飲ませてください**」（ヨハネ4・7）と言われました。ここから、この物語ははじまります。

イエスとサマリアの女性との会話をよく読みますと、女性とイエスの話は噛み合わず、話していることが必ずしも同じではなかったことがわかります。女性は井戸の水という物質のことを考えていました。「水を汲むもの」「井戸は深い」という言葉からわかります。しかし、イエスは生きた水について話しました。つまり、イエスは「**渴くことなく**」「**永遠の命に至る水**」のことを語られたのです。

今日は、二人の会話から四つのポイントを皆さんと一緒に考えてみたいと思います。

**第一のポイント**は、イエスが女性に「**この水を飲む者はだれでもまた渴く**」（ヨハネ4・13）と言われたことです。私たちの多くは、物質的なものが渴きを癒してくれると考えています。しかし、必ずしもそうではありません。

物質的なものが渴きを癒すことは一時的なものであり、しばらくするとまた渴くのです。この「渴き」は、喉の渴きのことだけでしょうか。豊かな国では、必要ないものまで好んで買ってしまいます。ものが溢れる中でもっとものを欲しがるという「渴き」はないでしょうか。

その結果、家がもので溢れ、ものがゴミのように散乱します。物質的なものにばかり目を向けているのでは、決して渴きを癒すことはできません。

**第二のポイント**は、イエスは続けて、「**しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渴かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る。**」（ヨハネ4・14）と語られたことです。つまり、イエスが与える水とは、私たちの心に注がれる神の愛です。

イエスは、私たちに救いの生きた水を与えてくださいます。イエスが与えてくださる救いは最終的に私たちの渴きを癒すものです。救いの生きた水は、十字架に至るキリストのご生涯に表された神の愛にほかなりません。

**第三のポイント**は、渴きの感覚と関連している飢えについてです。サマリアの女性とイエスが話していたとき、イエスの弟子たちは食べ物を買いに町に出かけていました（ヨハネ4・8）。そして、戻ってきたとき、弟子たちはイエスに食べ物を差し出しました。自分たちと同じように何も食べていないイエスは空腹であろうと思ったからです。

すると、イエスは「わたしにはあなたがたの知らない食べ物がある」と答えました。さらに、「わたしの食べ物とは、わたしをお遣わしになった方の御心を行い、その業を成し遂げることである」と言われました。食べ物は、水と同じように私たちのからだを維持する基本的なものです。私たちはそれなしには生きていけません。ところが、イエスは「わたしの食べ物とは、わたしをお遣わしになった方の御心を行う」ことだと言ったのです。このことは、人間は神の御心に従わなければ生きていけないということを示唆しています。これもまた、私たちが反省すべきことです。神の御心に 従順であること、つまり神とその愛の律法に従うことが、私たちの命を豊かにする食べ物であるということなのです。

**第四のポイント**は、サマリアの女性がイエスと出会った喜びをサマリア人たちに告げ知らせたとき、多くのサマリア人がイエスを信じ、イエスに会いに来たことです。その後、彼らはサマリアの女にこう言いました。「わたしたちが信じるのは、もうあなたが話してくれたからではない。わたしたちは自分で聞いて、この方が本当に世の救い主であると分かったからです」。 私たちの信仰の旅では、その始まりは他人の証言によって、イエス・キリストを知ったということでした。日本などでは、それは当然のことかもしれません。

わたしたちの信仰の始まりは、他の人からイエスについて聞いたからです。しかし、私たちは、自分自身でイエスの教えを聞いて、イエスを知り、信じる、つまり、個人的にキリストと出会うことが期待されているのです。ここでは、福音書記者聖ヨハネは「**聞く**」と「**知る**」(分かる)という2つの言葉を使っていることをここに止めましょう。

私たちは四旬節をすごしている日々、神のみ言葉を聞き、十字架に至るイエスのご生涯をもっと知ることができるよう、祈りましょう。私たちは、日常生活の中で聖書を読むことによって、自分たちが信じている神の語り掛けを自分の耳で聞く、つまり、聖書の言葉が、日々の生活の中で心に響いてくるように祈りましょう。また、黙想することによって、私たちの神を自分の神として知ることができるよう祈りましょう。私たちは年齢を重ねるにつれて、キリストをさらに深く、身近に知ることができるよう祈りましょう。

今日は、ある哲学者の言葉を引用して、私の話を終わりたいと思います。彼は次のように言いました。「人間は本来、渇きと飢えに満ちている」。その渇きや飢えを癒すために、人は物質的なものに目を向けるのです。しかし、私たちは決して渇きや飢えを満たすことができないでしょう。最終的に私たちの渇きと飢えを癒してくれる神を見つけるまでは終わらないのです。聖アウグスティヌスも次のように言っています。「**私たちの心は、神のもとに休まない限り、落ち着きません**」。

*Lazun naw san Vincent (pime)*